

第45回総会講演

「今、私たちが出来ることはなにか
変わるのは今しかない」

(公財) 国家基本問題研究所理事長 櫻井 よしこ

英霊にこたえる会は、平成31年4月23日ホテルグランドヒル・市ヶ谷で第45回総会を開いた。恒例の記念講演は、本会の副会長である(公財)国家基本問題研究所の櫻井よしこ理事長にお願いした。本資料は、その講演内容である。

(小見出しは事務局)

○平成の30年間は

どんな時代だったのか

こんにちは。今日はこのようなお席で約六十分間のお時間を頂きました。大変光栄に思っています。ありがとうございます。

今、私たちの国がどういう局面にあるかということを考えますと、天皇陛下が退位なさり、新天皇陛下が即位なさる。そして、元号が初めて『万葉集』から採られて「令和」という元号になることが決まりました。このことから、いろいろなことを私は考えてしまいます。先ほど寺島会長からお話がありまし

英霊にこたえる会
102-0073 東京都千代田区
九段北 3-1-1
靖国神社遊就館内
電話・FAX
03-3261-7415
郵便振替 00120-7-160184

新たな国立の戦没者追悼施設は、
心ある多くの国民の声と力を
結集して、断固阻止しましょう。

た憲法改正、一言も出来ていない。七十年以上が過ぎて、本当に憲法改正する必要を多くの人を感じているにもかかわらず、全く出来ていないということをおっしゃいました。

平成の三十年間というのは、一体どういう時代だったのかと考えてみますと、平和であったことは確かですが、この平和を作り出したのは私たち日本人は一体何をしたのかと問わなければならない。私たちが何か努力をした結果、この平和が保たれたということでは全くないわけです。たまたま国際情勢がそのような状況の中にあつて、私たちはそのおこぼれを頂いたに過ぎない。

平成の三十年間というのはいろいろ考えてみますと、何もしなかった時代ではないかと私は思ったりいたします。憲法改正ができないだけでではなく、教育において私たちは一体どういう教育をしてきたのか。その教育の質が年々悪くなっているのではないか。気概の

ある日本人をどれだけ育てることに成功したのか。経済だって、私たちは世界第三の経済大国と言いますが、三十年前のわが国の経済 GDP は国際社会において約十五パーセントありました。今は七パーセント弱です。こうしたことを考えますと、この平成の三十年間、私たちはひたすら優しくなりましたし、親切にもなりました。とつてもいいことだとは思いますが、そのほか国家としてやるべきことをほとんどやっていないのではないかと思えてなりません。

憲法改正も先ほど申し上げましたが、この憲法を改正しないほうがおかしいのです。アメリカの占領時代に、その占領統治をやりやすくするために作られた現行憲法は、全く日本人の価値観とは違うもので、その前文を読めば本当によく分かりますが、これを不磨の大典のように見なして、大事に大事に守ってきました。そして自民党は憲法改正をするために、自主憲法を作るために出来た政党であるにもかかわらず、何十年間もこの一番大事な原点を無視してきました。なぜこうなんだろうと思う時に、私はやはりこの「令和」から、そこから始まって、過去の日本の歴史の中で先人たちがどんなに努力したかというこ

○中華文明との決別 大和の道を進む

とを考えざるを得ません。

少し古い話になりますが、六世紀、七世紀に戻ってみたいと思います。私たちは、聖徳太子のあの六〇七年の有名な「日出処の天子」に始まる手紙のことは殆んどの人が知っております。この時、中国は日本を属国とみなしてはいたわけですが、聖徳太子がおつしやつたのは、中国がわれわれを属国とみなしているのは事実であるかもしれないが、わが国日本は決して属国ではありませんよということとを誇り高く宣言したのが、あの手紙であります。

その手紙は、ご承知のように隋の皇帝煬帝によつて受け入れられました。だからと言って、日中関係、日本と隋の関係が一つの手紙によつて変わったわけではありません。その後、何十年間も何十年間も、わが国は中華の世界から決別して、やまとの道を歩む、日本人の国づくりをするんだということ、本当に多くの努力を重ねなければなりません。でした。

例えば、それは聖徳太子の手紙から約五十

数年たった六六〇年、朝鮮半島では、百済が新羅及び唐に滅ぼされてしまいました。王様が人質になって連れて行かれて、国がなくなつた。その時に、百済の王の臣下がわが国に救援要請の手紙を送ってきました。わが国は女帝の齊明天皇の時代でした。王は連れて行かれたが、何とか百済を再建したい。ついでに、ぜひ日本国の支援を得たい。齊明天皇は直ちに決断して、臣下がこのように国を再建すると考えるのは当然のことであり、立派なことでもある。援軍を送ろうと直ちにお決めになりました。当時六十八歳。今時、六十八歳などまだまだ若い範中ですが、あの七世紀時代の六十八歳は、大変な高齢でしたが、当時六十八歳の齊明天皇自らが北九州の筑紫に移り、そこに本拠を築いて、そこから二万七千の兵を一千隻の船に乗せて朝鮮半島に送りました。

でも、齊明天皇はそこで崩御なされました。後を継いだのが、いわゆるご子息の天智天皇です。

天智天皇の下で日本軍は勇敢に戦いましたが、唐と新羅の連合軍にめちやめちやにやられて、敗れてしまいました。しかし、その時の撤退の仕方が大変に誇りある撤退でした。

天智天皇は、「我が軍は日本に撤退したが、帰つてすぐに、これから一年か二年か三年かは知らないが、唐と新羅がもう一度体制を整えて、わが国に攻め入つて来るに違いない。その時、敗れば、日本は本当に中国の属国になる」と。そのことを大變に恐れて、軍備を整えました。北九州でも大和でも瀬戸内海でも。都は海岸から遠く離して、大津に遷都しました。

こういう姿を見て、本当に感じ入つた国がありました。それが朝鮮半島の新羅です。新羅は、恐らく日本の姿を見て、国というものはどういう存在なのか、独立国であるということはどういうことなのかというのを日本から学んだと思います。そして数年後、唐が再び準備を整えて、日本に攻め入ろうということ、新羅に命令を下しました。「お前たちが先兵として行け、激しく戦つてこい、やわな戦い方をすると唐の軍が控えているので、どうなるか分からないぞ」と。そのような情勢下で、新羅は、日本に攻め入る代わりに、唐に対し反乱を起し、唐の軍勢を蹴散らし、朝鮮半島から追い出しました。その数年後、新羅は朝鮮半島を統一したのです。

夜久正雄さんという、この時代の専門家が

いらつしやいます。大家の中の大家と言つてよい方ですが、この方が書いた『白村江の戦』、その本の中で、「七世紀後半に起きたこの事件、新羅が唐の命令に反して、日本に攻め入るのを拒否して、逆に唐と戦つて独立国となった。そして、その時の歴史文書には、彼らはもはや日本国を蔑称の倭国とは書かずに日本国と書いた。これは七世紀後半の東アジアの一大事件であつた」との趣旨を夜久先生は書いています。

このようなことが起きました。そして、わが国は中華の世界とさらに決別するために、天智天皇の後の天武天皇が即位なさつた時、また新たにいろいろな手立てを講じました。当時の人たち、人口で言うと四百万人から五百万人と言われていますが、今の一億二千万人のわが国とは比べものにならない、本当に小さな国でした。

ご承知のように、三世紀、四世紀の日本国は文字がありませんでしたので、私たちは中国から漢字を学びました。その漢字をきちんと使いこなして、平仮名と片仮名を作り、そして独自の文化を築き始めました。もちろん律令制度など、進んだ制度であるとか、技術を中国から朝鮮半島経由で学びましたが、私

たちは本当に日本国に合つたものだけを探り入れました。盲目的にすべて、あの中華文明に従つたわけではありません。

ですから、その当時から既に、中華文明からなるべく距離を置こうという考え方が広がっていました。

それが白村江の戦いでさらに強調され、そして具体的な日本独立、聖徳太子の言う中華との決別をもつと本当の現実の政治、現実の国家の姿に反映してこういう気概が強くなつていたわけです。

そうしたところに、天武天皇が皇位につかれて、考えられました。「日本国が独立するには、ただ単に、唐や新羅や外国の勢力に負けないだけの軍事力だけでは不十分だ。何ゆえに大和が大和であるのか。大和民族というのはどういう存在なのか。そのことを一人一人の心の中できちんと納得できるようにしておかなければならない」と。

天武天皇は恐らくそのように考えて、日本人の心を大和にしていくためにはどうしたらいいのか。そこで『日本書紀』と『古事記』の編纂を命じました。『日本書紀』は漢文で書かれています。『古事記』は大和言葉で書かれています。このように大和言葉で書いた

『古事記』、素晴らしい歴史の物語がそこに書かれています。日本の国の成り立ちを、この記紀、両方の文書は書いてあるわけですが、日本の国の成り立ちの中で特徴的なことが幾つもあります。

例えば朝鮮半島で、朝鮮半島の国の成り立ちを記した書物と言えば、『三国記』などがあります。それが、『古事記』を比べると、日本国の『古事記』には民衆の物語、一般の人々の物語がたくさん出てくる。神様の物語も私たち庶民と非常に関係の深い形で綴られている。ところが、朝鮮半島は中国の国の成り立ちを示す文書の中で取り上げられているのは、全部と言っていいぐらい権力者の物語なのです。日本国だけが本当に、いわゆる国民、当時の言葉で言えば「大御宝」と呼ばれた庶民の人々の物語をたくさん載せています。このように天武天皇は、本当に心の中から私たちは大和民族なのだというふうを考え、その方向に国を引っ張っていきました。

形にした方があります。このごろ災害があると、よくボランティアということがある。若い人たちが一生懸命被災地に行つて、泥をかぶつた家を片づけたり、瓦礫を片づけたり、本当に汗みずくになつて一生懸命に働いてくださる。そういった若い人たちの姿を見て、いいなあと思ひます。

この人たちは、おじいさんやおばあさんを助けたり、病氣の人に手を貸したり、本当に優しく、困つた人を助ける仕事をしてくれます。

でも、このようなことは、今更ボランティアと呼んで、私たちがあたかも日本に新しく起きた現象であるかのように見るのはおかしいと思います。聖武天皇のお后は、施薬院とか悲田院というものを造りになった。貧しい人々のために医療を施す所、貧しい人々のために食糧を提供する所、こういったことを天皇ご自身が率先して、また皇后ご自身も率先して行い、それを制度として日本国に根付かせていかれたのです。その始まりが、何と八世紀の初めです。こうしたことを考えると、本当に大和の道というのは、心優しい道であります。同時に、いざという時には雄々しく

立ち上がつて戦う道でもあります。

このような国づくりをする時、それが並大抵の苦勞でなかつたのはお分かりだろうと思います。何と言つても、相手は大陸中国なのです。あの大帝國を築いた唐が相手なのです。その唐に対して、わが国は独立國である。多くを学んだことには感謝するが、だからと言って、決して中華文明の一部ではないのだ。私たちは大和文明なのだ。日本文明なのだという氣概を持つて、敢然と立ち向かつていて、そして独立を実現したのです。その圧力というものは凄まじいものだったと思わざるを得ませんが、古代の先人たちはそのようなことをちゃんとしてくださったわけです。

○『万葉集』から初めて採つた「元号」

聖徳太子が亡くなった後に編纂が始まったのが、『万葉集』です。『万葉集』は、百年も百年も百二十年もかけて編纂されました。その時代を生きた人々は、斉明天皇であり、天智天皇であり、天武天皇であり、そういった方々です。この時代を網羅した歌を四千五百首も集めていて、この『万葉集』の歌の半分以上が、詠み人知らず、名もない人たちが

詠んだ和歌ですね。名もない人たちが詠んだ歌を、これは素晴らしいと認めて、ちゃんと記録して残した。それを千二百年も千三百年も私たちは守ってきた。その当時、世界のどこに、名もない農民であるとか、名もない漁民であるとか、そういった人たちが和歌を詠む素養を備えていたかということです。日本以外にそんな国はなかったと私は思います。

また、『万葉集』には、天皇皇后の御歌もあれば、農民の歌もある、防人の歌もある、そして先ほど申しました、六六〇年に手紙をもらって、その三年後に二万七千の兵を送って敗れた、あの白村江の戦い、そこで戦死した兵士たち、その後を継いで防人となつて、北九州や瀬戸内海や大和の国にそれぞれ行つて、その土地に陣地を築いて国を守つた兵士たち、その人たちの歌も素晴らしいものがたくさん残っているわけです。ですから、本当に『万葉集』から初めて元号を採つたという、安倍政権の決断は本当に大変尊いものだと思います。これこそ本当の意味で、私たちは中華文明、もしくは中華の圧力からきちんと抜け出て、日本独自の道を築かなければならない、そのことを伝えているのが「令和」という元号ではないかと思ひます。

○日本国の高祖神の交代「天照大御神」

さあ、ここから先は、ちよつと学問的にも私には自信がないことです。このことを書く時に、実は今日ここにいらつしやる大原先生にもお尋ねをしました。今から申し上げる学説はあまり聞いたことがないということでしたので、どれだけ本当の意味で学問的に取り上げるべきことかは分かりませんが、溝口睦子さんという、八十年代後半の十文字学園の名誉教授の方が書いている天照大御神についての話です。この話は断定的に申し上げるわけではありませんが、そういう可能性もあったのかという程度にお聞きいただけだと思います。

さつき私は、聖徳太子から斉明天皇、天智天皇、天武天皇、聖武天皇に至る、この歴史の中で、日本国が中華文明から離れて、大和の道を歩みたいと決意し、実行したということ、かいつまんでお話し申し上げました。その時に、もしかして、もう一つ凄まじく大胆なことが行われていた可能性がある。それがさつき申し上げた溝口さんという八十年代後半の学者の方の一生を費やして研究されたこ

とですが、彼女の言によれば、大和の道を歩むために、天武天皇は、わが国の皇祖神、国を守つてくださる神様、今私たちは天照大御神だというふうに受け止めているはずですが、この神様の交代をお願いした可能性があると思ひ述べているのです。

彼女は、天照大御神の前、日本国の神様は、高御産巢日神（たかみむすひのかみ）だったという論を展開しています。高御産巢日、高という字に御製の御ですね。両方とも丁寧語と言うか、敬語です。敬語を二つ重ねた非常に位の高い神様、それが高御産巢日だったと。

この高御産巢日神は、豪族など、いわゆる当時の支配階級の方々に信仰されていて、それが皇室にも信仰されていた。ところが、高御産巢日神はよくよく見ると、天照大御神と全く対照的で、ご子孫がいらつしやらない。『日本書紀』を読んでも『古事記』を読んでもお分かりのように、天照大御神には弟の神様に須佐之男命がいらつしやるし、それから三代先の子孫がこの地上に降りて来て、また三代先の子孫が東征をなさつて、今で言う奈良の橿原宮にお宮を造つて、日本の初代の天皇となられた。それが私たちの理解している

神武天皇の物語であります、わが国の天皇、神様は、みんな天照大御神のご子孫になつてゐるのです。

ところが、高御産巢日神はたったお一人、ご子孫がいらつしやらない。そこで溝口先生は、この神様は恐らく北方からいらした神様であろう。この北方の神様を祭っていたけれども、天武天皇はさつき申し上げたように、日本国の独立を保つには、力だけではなく、心も大和でなければいけない。であるならば、神様も本当に日本人に親しまれ、尊敬されていた、いわゆる土着の神様でなければならぬ。

高御産巢日神が孤高する神であつたとするならば、天照大御神は太陽の神様ですから、どの地でも本当にありがたがつていたし、親しまれていたし、私たちの生活に非常に色濃くつながつていた。だから徐々に、この日本国の皇祖神としての立場を交代してもらつたんじゃないかというのが溝口さんの説です。

大変な衝撃です。私も最初読んだ時はまさかまさかと思いましたが、またそれが事実であるというふうに断定する気はさらさらありません。でも、あらためて『日本書紀』及び『古事記』を読んでみますと、本当に一番先

に出てくるのが高御産巢日神なんです。とりわけ『日本書紀』は高御産巢日がかなりの部分を占めているのです。『古事記』になると、高御産巢日が先に出てきて、天照大御神が次に出てきます。

私はこのような分野の専門家ではありませんので、ここで結論を出すなんていう野望は全くありません。私が考えてみたい、考えるべきだと思うのは、もしそのようなことが、大和の国たり得るために、神様にまで交代をお願いする発想があつたのであるなら、万が一そのようなお願いをしたとするのであるならば、古代の人々の必死の思いというものを受け止めるべきではないのか。

日本国というものを確立するために、どれだけ真剣に命がけで取り組んだのか、尊敬する神様にまで交代をお願いして、日本国を本当の日本国にしたい、大和の国にしたいというような発想があつたとしたら、これは天地をひっくり返すようなことになります。彼らの決意がどれだけ固かつたかということを考える時に、それと同じような変化が、それと同じような大改革が今必要な日本で、なぜそれだけの努力ができないのかという疑問につながつていくのです。

○内外にわたつて問題の山積

何故現憲法にこだわるのか

ご承知のように、日本の内外は大変な状況になっていきます。戦後、私たちはアメリカに占領されて、日米安保条約を結んで、日本国憲法を作られて、アメリカの庇護のもとに暮らしてきました。「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しよう」と決意した」。こんな愚かな前文を七十年以上も後生大事に守っている。九条二項、それがどんなに空疎であるかは申し上げるまでもありませんが、それは様々な解釈を行つて、自衛隊の活躍する場を増やしてきましたけれども、九条二項は厳然としてそこにある。これを変えなければ、中国の脅威にどう対応するのか。ロシアにあんなにこけにされて、われわれはどうするのか。中国は上手に笑顔でやつてきます。その上手な笑顔の裏にどれだけの悪意と侵略の意図が隠されているか。いざとなつたら日米安保条約でアメリカが何とかしてくれるだろうとは、もう期待できなくなつたのはオバマ政権の時から明らかであります。

六年前、オバマさんは、シリアでの内戦に
関して言いました。「アメリカは軍事介入し
ません。アメリカは世界の警察ではないから
です」と。その時から本当に世界は目に見え
て変わったのは、もう皆様のほうがよくご存
じ。皆様のほうがどれだけ悔しい思いをして
いるか、私は理解しているつもりです。

このような国際情勢があつて、そして日本
国の状況を見ると、どうでしょうか。安心で
きるのか。さつき申し上げたように、私は平
成の三十年間、日本はなすべきことを何もし
なかつたという慙愧の思いを抱かずにはいら
れません。

そしてまた、天皇陛下のご様子を見ると、
昭和天皇、平成の今上天皇、そして新たに天
皇になられる皇太子様。ご様子を見てみると、
お心優しい、そして思いやりのある存在にな
つていらつしやることは分かりますが、本当
にいざという時に日本国の求心力となり得る
のか、立憲君主として立派にその役割を果
たしていただきたいと切に願うばかりであり
ます。

そしてまた皇室の現状を見る時に、秋篠宮
様がおられ、悠仁様がおられ、皇位継承はこ
れから何十年間も大丈夫だという見方も確か

にできますが、では、今のままの皇室で良い
のか、誰一人今のままで良いということと言
う方はいらつしやらないと思います。

外にも内にも問題は山積しているわけです。
その時に、なぜこのくぐらない憲法にこだわ
るのか。なぜこれを後生大事に、不磨の大典
として守ろうとするのか。なぜこれを変える
ことができないと思うのか。そのように思う
時には、私はやはり聖徳太子以降の先ほど申
し上げた歴代の天皇、その時代のリーダーた
ちの大きな決意を思い出すべきだろうと思
うのです。

何ゆえに、この大きな壁に私たちはぶち当
たつて、そこで止まつてしまうのか。止まつ
てしまつたら最後なのです。そこから先は後
ずさりするばかりです。後ずさりした拳句の
果てに、私たちは恐らく、中国の属国になり
ます。

七世紀から八世紀にかけて、その時代のリ
ーダーたちは中国の属国になることを必死で
止めたのです。大和の道を築いたのです。そ
して、素晴らしい国を作りました。それから
千何百年もたつて、大東亜戦争を戦いました。
あの大東亜戦争のご体験については、皆様方
が本当に貴重な体験をしていらつしやる。そ

して、多くの命を犠牲にして敗北した日本で
もしかして私たちは国体を失うところであり
ました。昭和二十年のあの敗戦の時、今では
信じられないぐらい多くの人々が、昭和天皇
の罪を問おうとしました。責任を追及しよう
としました。天皇こそ戦犯であるということ
は、非常に多くの人たちが当時、口にし展開
した主張であります。

私たちはかろうじて国体、国柄を守ること
ができたのです。日本国にも非常に優れた人
たちがたくさんいました。天皇陛下に責任を
負わせないために、自らがその罪をかぶつた
いわゆるA級戦犯とされた方々もいました。
そしてアメリカにも、グルー大使をはじめと
する、本当に少数ですけれども、日本国を理
解する人々がいました。そしてまた、昭和天
皇がマッカーサー元帥と会つた時、その立派
な言葉と態度が、マッカーサー元帥の心をゆ
すぶりました。敗戦国のリーダーというのは、
往々にして、自分の責任逃れを言つたり、命
乞いをしたりする。でも、わが国の天皇陛下
はそうではありませんでした。これは本当に
立派な帝王学を身に付けられていたからであ
ります。

このようにして、ようやく私たちは、本当

に狭い狭い隘路を通つて、わが国の国柄をそこで絶えさせないことに、ようやく成功したのです。皇室が当たり前のようにして存続したなどと思つてはならない。大変な犠牲と大変な悲しみと苦しみと葛藤の中で、私たちは皇室をお守りしたのです。その葛藤の一つが、このくだらない憲法を受け入れることでもありました。

いろいろ考えると、あの時に先人たちが下した苦しい決断、その苦しさであるとか、悔しさであるとか、そういつたものを、平成が終わろうとする今、私たちは分かっているのか、伝えてきたのか、家族の中で話し合ってきたのか、会社で後輩たちに言ってきたのか、そう思うと後悔することばかりです。

○「令和」の時代 日本の在り方をどう考えていくのか

「令和」の時代、世界は日本が「令和」になつたからといって、日本国に対する見方が変わるわけではないと思います。でも私たちは、一つの区切りとして、これを変えなければならぬと思えます。何としてでも、日本国を内側から立て直さなければならぬ。日

本国が本当の意味で、あの聖徳太子以来の大和の国であり続けることができるように努力をしなければならぬと思えます。

その意味で非常に気になることが、幾つも幾つも本当にあります。例えば、私たちは新しい天皇陛下を頂くようになるわけですが、この皇太子殿下に対する教育を国としてどのように整えてきたか。学習院の高等科の教師をしていた小坂部という人物がいます。年の頃はちょうど今、八十五、六だろうと思えますが、この人の書いた本があります。『浩宮の感情教育』という本です。飛鳥新社から約二十年前に出た本です。読売新聞のペテランの皇室担当の記者から、いい本だから読むようにと薦められて、手に取りましたが、一ページ目から非常な違和感を感じました。読み進むごとに、この小坂部という教師はどういう人だろうと疑問が深まりました。読んでいて不快感しかない。不快感というのは、この教師は学習院高等科で二年間、今の皇太子殿下、当時は浩宮親王殿下でいらつしやいますけれども、二年間、担任となつていたのです。ところが、小坂部という教師の浩宮様に対する視線はものすごくおかしい。かつて昭和天皇に帝王学を授けようとした白鳥庫吉、その

ほかの錚々たるメンバーの、本当に誠を尽くした、愛情にあふれた、しかし厳しい教育者としての側面なんかゼロです。

私は、なぜこの学習院における現皇太子様に対する教育がこんな変な内容なのか本を読んで、一番最後のほうで分かりました。小坂部という教師は左翼、だつたんです。共産党員かどうか分かりませんが、左翼です。そこに書かれてあることは、天皇制の打破とか、天皇制というものが日本国に合わないとか、そういうことをたくさん書いています。

そして日本国の、これから皇太子様が、雅子様とご結婚なさつた時、ご成婚の時、最後に「皇太子への手紙」という部分が一つの章としてありますが、そこに書かれていることは、私は、私はずっと、あなたを、あなたというのは、その浩宮様です、見ていて、感情も感動も何もない人間だと思つて見ていたが、雅子様を一生かけてお守りするということを、雅子様に誓つたと。これは雅子様が記者会見でおつしやつたことですが、その言葉を知つて初めてこの思いを覆した。あなたの役割は雅子様を幸せにすることなんだ。それが人間としての道なんだということが最後に書いてあります。

私は、昭和天皇に対する帝王学の教え、そしてまた、今上陛下に対しても、帝王学というものは教えられました。もちろん、占領下の日本で、クエーカー教徒のバイニング夫人という、神道の国の次なる天皇陛下に対して、キリスト教徒を家庭教師に付けるとは何たることだと思いますが、でも、そのバイニング

夫人がいる傍らで、多くの日本の碩学が本心に心を込めて帝王学を現陛下にお教えしたと思います。だからこそ美智子妃殿下は、皇太子殿下からのプロポーズをお受けになるに当たって、皇太子としての務めは、すべて第一義的に国のため、公のため、プライベートなことは全部二の次であるという、非常に強い使命感に打たれ、結婚を決意しましたということをお美智子様はおっしゃっている。

さあ昭和の時代と平成の時代、これは敗戦と占領を挟んでいますから、非常に大きく変わったのは当たり前です。天皇陛下、皇太子殿下に対する教育のあり方も大きく変わったのは当たり前です。今、私たちは「平成」から「令和」に移ろうとして、この新しい変化は、戦後の日本社会の非常に本質的な質的な変化を反映しているに違いないのであります。私たちの社会がおかしくなったように、学習

院における浩宮親王殿下への教育もおかしくなりました。

今日確認したことです。この小坂部という人は、プライベートな、プライベートと言うか、授業ではない時に、浩宮様に向かつて、「おい、美智子元氣か」というような口を利く、とんでもない教師だったようです。この人はそのあまりにもひどい言動によつて解雇されたと言われました。でも、解雇されるような教師がなぜ、二年間も学習院の高等科で浩宮様の担任になっていたのか、これこそが本心に国家としておかしいことなのです。このようなことを私たちは知らずに、見過ごしてきました。本心は知るべき立場にある人々がきちんと監督しなかつた。結果として、今の皇室があり、今の日本があります。

「令和」の時代は、並大抵のことでは乗り切れない非常に厳しい時代になると、私は思っています。私たちの時代で、もしかして本心にわが国は、日本国の良き面をすり減らして、つぶしてしまいかもしれない。そんな危機感さえ私は感じています。おめでたい改元でありますので、あまりこういつたことを激しく非難する気にはなれないのですが、今日は「英霊にこたえる会」であります。英霊の

皆様方がたった一つの命を国のために捧げた親もあり、妻もあり、子供もある身で、自分の命を捧げてくださった。その方たちの思いにこたえるには、今私が申し上げたような問題意識を私たちが持たなければなりません。そのように思います。

間もなくあと一週間もすれば「令和」の時代になりますけれども、私は今申し上げたような観点から、古代の人々、近代でもその戦争の中で命を捧げた方々の思いを忘れないようにして、「令和」の時代に日本が今まで失ったものを全部取り返すぐらいのことをやるように、一生懸命に旗を振っていきたくと思っています。どうもありがとうございます。



終戦の詔書

昭和二十年八月十四日

朕深く世界ノ大勢ト帝國ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク
朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ

抑帝國臣民ノ康寧ヲ圖リ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々措カサル所曩ニ米英二國ニ宣戰セ
ル所以モ亦實ニ帝國ノ自存ト東亞ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他國ノ主權ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ志ニアラ
ス然ルニ交戰已ニ四歲ヲ閱シ朕カ陸海將兵ノ勇戰朕カ百僚有司ノ勵精朕カ一億衆庶ノ奉公各々最善ヲ盡セルニ拘ラス戰
局必スシモ好轉セス世界ノ大勢亦我ニ利アラス加之敵ハ新ニ殘虐ナル爆彈ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ慘害ノ及フ所
眞ニ測ルヘカラサルニ至ル而モ尚交戰ヲ繼續セムカ終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ招來スルノミナラス延テ人類ノ文明ヲモ破却
スヘシ斯ノ如クムハ朕何ヲ似テカ億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神靈ニ謝セムヤ是レ朕カ帝國政府ヲシテ共同宣言ニ應セ
シムルニ至レル所以ナリ

朕ハ帝國ト共ニ終始東亞ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ對シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス帝國臣民ニシテ戰陣ニ死シ職域ニ殉
シ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内爲ニ裂ク且戰傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ
朕ノ深く軫念スル所ナリ惟フニ今後帝國ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然レトモ
朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス

朕ハ茲ニ國體ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ若シ夫レ情ノ激スル所濫ニ事端ヲ滋
クシ或ハ同胞排擠互ニ時局ヲ亂リ爲ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宜シク舉國一家子孫相傳ヘ
確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ總力ヲ將來ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓テ國體ノ精華ヲ
發揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ體セヨ

御名 御璽

昭和二十年八月十四日

「終戦の詔書」謹解（要約）

昭和二十年八月十五日に、昭和天皇みずから放送され、日本人の大多数が感泣した詔書である。以下その大意を謹解する。世界の大部分、日本帝国の現状に鑑みて、この際非常措置によつて時局を收拾しようと思ひ、次のことを日本国民に告げる。

私は日本政府に、アメリカ・イギリス・支那・ソビエト聯邦四国に対して、その共同宣言を受諾する旨通告させた。

そも／＼日本国民の平和と幸福を図り、すべての国が相共に榮えることは、日本の皇室が先祖代々願われて来たことで、私も常々願つて来たことであり、先にアメリカ・イギリス二国に宣戦したのも、実に日本の自存自衛と東亜の安定を願つてのことであり、他国の主権を排し領土を侵す（侵略する）などということは、全く考えもしないことである。

ところが、戦争が始まつて四年もたち、陸海軍の将兵は勇敢に戦ひ、各部署の役人や、国民一人々々が最善を尽したにもかかわらず、戦局は必ずしも好転せず、世界の大部分もわが国に有利とは言えず、そればかりか敵は新たに残酷な爆弾（原子爆弾のこと）を使用して、罪のない一般市民を殺傷し、惨害はどこまで及ぶか測り知れない状態である。このような状態で戦争を続けられれば、遂にはわが民族の滅亡を来すばかりでなく、ひいては人類の文明も破壊し尽すであろう。このようなことになつたなら、どうして常々日本国民を大切にされて来られた皇室のご先祖に対して申し訳が立つてあるうか。これが日本政府に共同宣言に應じるよう命じた理由である。

私は日本国民と共に終始東亜の解放に協力した諸盟邦（タイ・印度・ビルマなど）に対して、遺憾の意を表さないではいられない。日本国民で戦陣に死んだり、職域に殉じたり、非命にたおれたりした者、及びその遺族に思ひを致せば、はらわたを引き裂かれるような痛みを覚える。また戦傷を負ひ、災禍を蒙り、家業を失つた人達に対しては、何とか万全の措置をして、立ち直つてほしいと願つてゐる。考へて見るのに、これから日本国民の受けるであろう苦難は尋常のことではあるまい。日本国民の辛い気持ちもよく分つてゐる。けれども私は、事ここに至つては、堪え難いのを堪え、忍び難いのを忍んで、万世のために（長い先々のために）太平を開こうと思ふ。

幸いにして万世一系の国体を護持することはできた。これから先は忠義の心の厚い国民の真心を信頼して、国民と共に歩む積りだ。もし仮にも激情の赴くまゝに勝手な行動をとつたり、或いは国民同志で争ひ合つて世の中を乱し、そのために大道を誤つて、信義を世界に失うようなことがあれば、それは最も戒むべきことで、是非慎んでほしい。どうか国中が一族となつて、子孫相伝え、かたく神代より引き継いだわが国の不滅を信じ、その任の重いこと、道の遠いことに思ひを致し、総力を将来の建設に傾け、道義を篤くし、志操を堅くし、誓つて日本国体の素晴らしさを發揮し、世界の進運に遅れないようにしてほしい。どうか私の氣持を体して、頑張つて貰いたい。

靖

國

カ

レ

ン

ダ

ー

やすくに

英霊にこたえる

一億国民のこころを結集しよう。

靖國 令和2年

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

英霊にこたえる会

▲これは縮小版です。原寸は縦54.5×横36.0cmです。

- ◎靖國神社への総理・閣僚の公式参拝を定着させましょう。
- ◎「靖國神社は、我が国の戦歿者追悼の中心的施設である」
国家、国民がこそって戦歿者英霊に感謝の誠を捧げましょう。
- ◎英霊顕彰の国民運動の輪をひろげましょう。

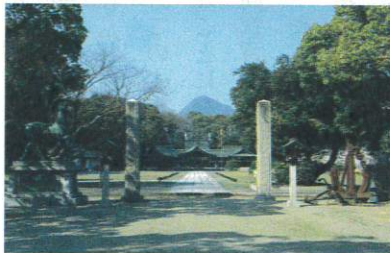
「靖國カレンダー」を一家に一部掲げましょう。

カレンダー絵柄



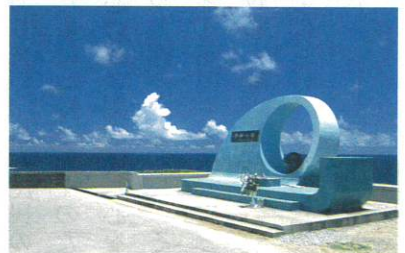
1-2月

御本殿へ参進する神職の方々



3-4月

御祭神35,700余柱・廣岐宮香川縣護國神社



5-6月

一般財団法人沖縄県遺族連合会が管理する
沖縄県喜屋武岬の慰霊塔「平和の塔」

7-8月

期間中約16万人の入出で賑わった平成30年
靖國みたままつり(毎年7月13日~16日)

9-10月

御祭神25,060余柱・山梨縣護國神社



11-12月

ハワイ・真珠湾のアリソナ記念館

※カレンダーの絵柄については、多少変更する場合がございます。

